

重なる経験になったが、それで燃え尽きた訳でもないだろうが、ある頃から高桑さんは、「今後はハナノミとコブヤハズカミキリ類だけにする」といって、ライフワークを絞り込んで採集活動を行なわれるようになった。コブヤハズ・サミットなる調査・研究会(実際は飲み会)を立ち上げ、そこの仲間を中心とした交流や自らの採集でデータを集積し、日本のコブヤハズの集大成を目指していた。

高桑さんを知る方なら誰もが解るだろうが、特に飲んでいるときの彼は、「いい \wedge 加減」であり、「いい \searrow 加減」(この二つを文章上で区別することは難しい。要するに前者は「適当, デタラメ」後者は「中庸, 程よい加減」ということ)で、基本的に楽観主義者なので、前者の彼に被害を被る場合も、特に私のようなどちらかといえばネガティブ思考の人間はまああったように思う。反面後者の彼が、癖の強い虫屋集団を程よいバランス感でまとめてきた功績も極めて大きい。いずれにせよ、今後彼のような、時代を象徴するタイプの虫屋が新たに出て来るとは思えないのは、寂しい限りである。

今、これを書いている私の背後に8箱ほどのドイツ箱が積んである。多くの方がご承知のように、あと半年いや3ヶ月あれば完成できたであろう「コブ

ヤハズ図説」の、8,9割方出来上がったプレート標本と原稿を残して高桑さんは逝ってしまった。その無念さがどれほどであろうかは、身に突き刺さるように察せられる。せめて残った周囲の者の手で何とかして完成に持っていかなければならないので、とりあえずプレート標本のデータ打ち込みは私が引き受けてきた。この作業は既に配列はされている標本を、しかし1頭々ラベルを見てなるべく同様のラベル、表記になるようデータを読みとっていくのだが、始めてみて分かったのが高桑さんご自身の採集品のラベルは「いい加減」どころではなく、実は非常に詳細、緻密に記されている。周知のようにコブヤハズ類は種内の地域変異ないしは種間の接触前線での雑交や移行?の実態が経年変化をも含め極めて複雑なので、ラベルは詳しいに越したことはないのだが、ここまで細かくされると本人以外には解読不能というか、どの辺りで均一化するかの判断は、なかなか難しいものがある。正直やっかいなものを引き受けてしまったとチラリと思いつつも、毎日少しずつながらも黙々と作業を続けている。今、私が天国に伝えられるメッセージはおそらくこれしかないのだから……

(東京都府中市)

高桑正敏(タカクワ)を偲ぶ

楨原 寛

タカクワと、いつも呼び捨てにしていた。彼も私のことをマキハラさんと呼んでくれた。だけど、彼も私と同じ1947年生まれ。私が早生まれ、彼が遅生まれで学年が私の方が一つ上だったということで。

会って話をするのは常に酒の席。虫屋仲間も不思議に思われるかもしれないが、タカクワとは一緒に採集をしたことがない。採集地でもほとんど会ってはいない。これは、彼は関東の人間で人付き合いがよく、私は九州出身の田舎者で採集も常に一人でやっていたからである。

タカクワは好き嫌いのはっきりした人間だと思っている。彼と本当に親しくなれたのは1981年私が九州大学から、つくばの林業試験場(現森林総合研究所)に来て以降である。彼と故草間慶一さんが共同でカミキリ大図鑑を編纂していた時、ある飲み会で、私にアラゲケシカミキリ属 *Exocentrus* の部分の草稿を見せてくれた。この属は、本土では種類が少ないが、南西諸島では多い。私は鹿児島に長く住み、地の利を活かして、南西諸島ほぼ全域の種を集

めていたし、私としては珍しく、全形図と雄交尾器の図を描いていたので、概要を把握していた。それで、その草稿はかなり間違っていると指摘した。それで大図鑑でこの部分だけやるはめになったのである。その後、彼から徳之島の材から羽化したアラゲケシカミキリ属のカミキリ2個体を受け取り、私の採集品と併せて、リュウキュウクモガタケシカミキリ *Exocentrus takakuwai* を記載した。多分、これで彼が私のことを認めてくれ、親しくもしてくれたのだと理解している。

タカクワの結婚披露宴の席で、私を含む何をするか、何を言うか分からない悪童ばかりが中央の席に隔離された。スピーチの前のキャンドルサービスで回ってくる前に、私がよくやるのだが、ローソクの芯の部分にハシで穴をあけ、そこにビールを流し込んでいた。彼は順に席を回り、私どもの席に来て、「有難うございます」と言い、ローソクに点灯した。案の定、ローソクに火は点くがすぐに消える。消えるとすぐに「タカクワ消えたよ」

と言って呼び戻し、点け直させていた。これを何度も繰り返していたら、さすがに気づいたらしく、それでも怒らずに（実は怒っていたかもしれない）、次の席に行ってキャンドルサービスをやっていた。しかし、このあおりを受けたのは私だった、私だけスピーチさせてもらえなかった。時間が足りなくなかったという理由で。式後、みんなで胴上げをしようという話になった。それで彼に近づくと、勘のいい彼は、ロビーから落とされると思い、逃げ回った。メンバーは言えないが、実際やりそうな者もいた。とにかく寛大な男だと尊敬した。

タカクワは大型美麗種が好きであった。私も実は大型美麗種が好きである。人があまり採れない珍品を数多く採るのが趣味でもある。彼が大型ハナノミをまとめていることを知り、私も率先して採ることに努めた。石垣島ではタブノキの倒木に大量のホシハナノミ属 *Hoshihananomia* の種が集まっていたので、一部を捕まえ、彼にやると珍品だと言って喜んでくれた。また、三宅島が2000年に噴火し、噴火後3年目から昆虫相の調査に入った時にマレーズトラップを使い虫採りをしたが、オオキボシハナノミが、多分1000個体くらい採れた。そのうち、300個体くらい彼に進呈した。「これはどこでも数が少なく、採りにくい種だ」と言って感激して受け取ってくれた。そういえば、私も三宅島以外では、せいぜい年に1個体採ればいい方であった。この調査を企画してくれたのは、当時東大の樋口広芳さんで、「高桑さんとは鎌倉高校の同期です」と言っていた。世の中は狭いもののだと思った。しかし、この二人はここまで性格が違うのかと思うくらい、違っており、

樋口さんは聖人君子を絵に描いたような人で酒は飲まず、きれいな女性に会っても、平然と出来るが、タカクワは酒が好き、きれいな女性をみると目が輝く、という風に全くの正反対である。ただ、二人とも仕事はよくやる。私はタカクワに近いが、なぜか樋口さんともうまくいった。

2016年4月にタカクワから、コブのPDFが送られてきた。そのお返しに多摩森林科学園の甲虫相、東カリマンタンのクワガタムシその他を送った。その後、次のようなメールがきた。

「別刷ありがとうございます。がんばって論文を書かれているご様子に嬉しく思います。でもクワガタまで書かれているのには驚きです。多摩森林科学園のカミキリムシではクモノスモンサビの記録に驚きました。高尾にいるとはびっくりです。また、何か別刷りがありましたら送ってください。2016年4月16日」

これが、タカクワとの最後のやりとりとなった。このメールを見て、まだ、元気にやっているとと思っていた。私のがどのガンで長期入院をし、死にかけたのに、世の中は皮肉なものだと思う。しかし、彼はさんまのような顔だちと違い、負けず嫌いの頑張り屋だと、私はよく知っていた。彼の書いた報文は、コメツキムシの大平さんには及ばないが、確か900近いのではないか。酒、遊び以外は精力を全て虫に注いできた人生で、悔いはないのではないかと思っている。ご冥福をお祈りします。

(いすみ市)